

美容技術を用いた「結ぶ」の表現(3)

～帯『オブジェ』～

The Expression “MUSUBU(Tie)” with Beauty Techniques (3) - OBIJET (Objet of Obi) -

青木和子¹⁾

抄録

帯結びは一日だけの命。その日のうちにほどかれる運命にある。着物着付けにたずさわる者は「一生懸命つくった帯型をいつまでも残しておきたい」、「これから結ぶ帯型の見本があればいいのに」という願いを抱いている人も多い。この願いを実現すべく試行錯誤をへて出来上がったのが、手のひらサイズの、帯のオブジェ『オブジェ』である。

キーワード： オビジェ 帯型のミニチュア 髪 帯 結 山野流 着物着付け師

I. 目的

人が着物を着て帯を結んで一日を過ごす営みの中に帯型は存在する。つまり、人の動きの中に帯型はある。これが、見られるだけの静止した存在である「オブジェ」になれるものだろうか。作品展を企画するに際して、以下の3つの目的をたてた。

- ① 時間と空間にとどめられるか。
- ② 持ち運び可能な小さなサイズにできるか。
- ③ 小さいながらも本物（実際に結ぶ）にこだわられるか。

そして、その出来上がり作品を見て頂くべく展示会を開いて、「芸術品」になれるか、その全行程が企画目的である。

II. 作品の制作と展示

最初に、今回制作する作品の大きさは実物の3分の1と決めた。その理由は、実際の大きさでは現実的すぎてオブジェになりにくいからということと、小さくなれば幾つも並べて陳列でき、運搬がしやすく、そして何よりも「可愛らしい」からである。

また、3分の1のサイズは、普通の大きさと遜色のない技術力でつくれる極限の大きさであることがわかったからでもある。

帯は、実際使用する帯の帯地を用いて、長さも幅も実物の3分の1になるように縫ってつくった。小物も同様になるよう努めた。

また帯を結ぶボディは、あえて人の姿に似せたものを用いず、帯型のイメージを最大限に引き出すため青竹に斜めの切り込みを入れるだけのシンプルなものを特別に竹屋に作ってもらい使用した。

出来上がりだけを重視したミニチュアの着物を着た人形は沢山あるが、このように「帯を結ぶ」ことを目的としたミニチュア作品は他に例がないように思う。

出来上がった作品は、「結ぶ」でつながる髪型を担当下さった山野美容芸術短期大学教授、富田知子氏と共に銀座のギャラリー「ギンザギャラリーハウス」で展示会を開き、広く公開する機会をもつことができた。

以下は、その時に展示した作品である。

竹に巻いた次の4作品「夢文庫」、「香恋」、「凜花」、「鼓舞」は、全て実物の3分の1でできている。帯結びは、創作して名前をつけた。一部固定するために縫う必要があったが、全工程で人に結ぶことと同じ作業で仕上げた作品である。

1) Kazuko AOKI

山野美容芸術短期大学

連絡先：〒192-0396 東京都八王子市鍵水 530



1) 夢文庫 (ゆめぶんこ) 80×90×90 (竹を含む)

文庫は江戸時代の武家女子の代表的な帯型である。シンプルな文庫結びは、実はつくるのが難しい着付け師泣かせの帯型でもある。正統派の文庫に、夢(羽根)を乗せてみた。

2) 香恋 (かれん) 180×110×80 (〃)

正面からのアングルから、「可憐」をイメージした。帯型は、恋やハートを匂わせる形となったので、香恋と名付けた。ゴージャスに仕上がったと思う。



3) 凜花（りんか） 180×110×750（＂）

立てものの帯型の定番は、凜とつくらなければなら
ない。それに花を加えた帯型である。（もちろん、3分
の1で作った小さな帯1本で切り貼りすることなく仕
上げている）

4) 鼓舞（こまい） 180×110×750（＂）

お太鼓系の帯型である二枚扇をつくり、たれ部分に
沢山のひだを加えてみた。華やかに舞うイメージが表
現できたと思う。

次の4作品（「袋帯」の3作品と、おちよこに乗った「山野流細帯十二段返し」）は、小さいながらも本物の形こだわることを目的とした。

帯型だけがスクラップされている状態の木箱に入った3作品は、山野流の着付師免許を取得するまでに必ず習得しなければならない帯型である。まず教える側が理想的な出来上がりを作り、教えられる側はそれを手本に正確に形にしてゆく技術を学ぶ。今回は、山野流を伝える者として小さいながらも理想的な出来上がりにこだわり、帯型の見本になりえるものとして具現化した。



5) 長舟（おさふね）（山野流）100×100×30

山野流の「揺れる帯型」である。初代山野愛子が考案した二四帯（にいよんおび）で結んだ、3分の1サイズの長舟である。山野流に入門すると、初伝・中伝・奥伝のうち、中伝で習う帯型である。



6) 二重太鼓（にじゅうだいこ）

（山野流）100×100×30

典型的な二重太鼓である。シンプルな帯型であるからこそ、本物の形にこだわることに苦勞した。山野流の二重太鼓である。



7) 花の舞（はなのまい）（山野流）100×100×30

山野流の着物着付け師を取得するための技術試験で、この帯型が指定されている。時間内に振袖を着せるところからこの帯型を結ぶまでが試験内容である。こんな見本が欲しかった、という声が寄せられていた。



8) 細帯十二段返し (ほそおびじゅうにだんがえし)

(山野流) 20×30×10

浴衣に似合う帯型の 12 種類を、「一文字」から十二段に変化させていく山野流宗伝：新藤愛子が考案した帯型である。入門したての生徒が、楽しみながら細帯の帯型のバリエーションを増やすことができる。

III. 考察

「オビジェ」を制作する際に目指した目的が達成できただろうか。

まず、人の背中でしか現れないはずの帯型はであるが、それだけを切り取って時間と空間にとどめられたと思う。服は、人が着てその機能や美しさを発揮するものだが、日本の着物や帯は平面で構成されているから、人が着なくともそれだけで芸術になりうるものであることを再確認した。

また、小さなサイズであるが、「結ぶ」に至るまでの準備が一番時間と手間がかかった。特に 3分の 1 サイズの帯作りは、結ぶに適している帯地を見つけることに苦労した。幾度もやり直しをしたが、最終的には納得できる「本物のミニチュア」ができたと思う。

最後に、「本物にこだわる」である。竹に結ぶ帯型は小さい存在だが、着付け師としての誇りをかけて本物と損傷のない出来上がりが実現できた。また、新しい帯型を考案するうえで一役かうことができると確信した。2012 年の夏、国際美容協会が主催する全国の着物着付け師が集まるサマーシンポジウムに講師として招かれた際、帯を創作する研修会で約 250 人の参加者を対象にこれを用いて研修を行った。こちらが人数分準備した 3分の 1 の帯キッドを使って、各々が「オビジェ」を創作し、コンテストを行なった。着付け師ばかりが競ったコンテストなので、素晴らしい作品が並び、壮観だった。コンテストの後に、通常の帯結びと異なって「ほどこくことがない存在として」持ち帰ることができたことは大変意義深いと考えている。

そして、銀座のギャラリーで富田氏とのコラボレーションにより展覧会を開催できたことは大きな成果だったと考えている。

一日限りの儂い運命である「髪」と「帯」を、ミニチュアにすることで時間と空間に「美しい存在」としてとじこめることができたと思う。

富田氏を始め、協力下さった方々に心から感謝したい。